



## ハインリヒ・ヴェルナーの生涯

著者	福島 伸雄
雑誌名	東北ドイツ文学研究
巻	56
ページ	81-85
発行年	2015-09-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00127137">http://hdl.handle.net/10097/00127137</a>

# ハインリヒ・ヴェルナーの生涯

福島 伸雄

## 1. はじめに

ゲーテの『野ばら』の作曲は、世界中で 154 曲、あるいはそれ以上存在すると言われている。日本でその中で特に知られているのは、シューベルトの作曲とヴェルナーの作曲である。それらの曲は学校の音楽の教科書に長く取り入れられ、歌われてきた。また、ラジオやテレビなどを通して、そのメロディーが、そのヴァリエーションが私達の生活の中に深くとけこんでいる。

ところで、シューベルトの生涯は私達によく知られているが、ヴェルナー (Heinrich Werner) の生涯は必ずしも知られていない。これはなぜか？理由はいいろいろある。第一に、ヴェルナーが短命であったこと。つまり、彼は、32 才で亡くなった。しかし、シューベルトもまた短命であった (31 才)。第二に、シューベルトはウィーンという大都市で活躍し、有名になったが、ヴェルナーは必ずしもそうではなかった。ヴェルナーはドイツのブラウンシュヴァイク (Braunschweig) という都市で、歌を教え、ピアノのレッスンをしながら、かろうじて彼自身の生計をたてていた。第三の理由として考えられるのは、彼の人生についての資料が少ないということである。無名だったから当然とも言えるが、第 2 次世界大戦の際に失われてしまったということも考えられる。

今日、彼の人生についての手に入れやすい資料としては『ウィキペディア』<sup>1)</sup>によるものと、メッケ博士の論文<sup>2)</sup>等がある。また、2000 年にカーリン・リヒターという女

---

1) [https://de.wikipedia.org/wiki/Heinrich\\_Werner](https://de.wikipedia.org/wiki/Heinrich_Werner) (Kompo-nist) (2012 年 10 月 10 日、取得) 以下、Die Wikipedia と表記。

2) Friedrich Mecke: Heinrich Werner. In: Historische Kommission für die Provinz Sachsen und für Anhalt (Hrsg.): Mitteldeutsche Lebensbilder. 2.Band. Lebensbilder des 19. Jahrhunderts. Selbstverlag, Magdeburg 1927, S. 220-226.

性によって『ハインリヒ・ヴェルナー、ゲーテの「野ばら」の作曲者』<sup>3)</sup>という本が出版される。カーリン・リヒターは、旧姓カーリン・ヴェルナーと言って、彼女は自分の祖先の研究をしていて、たまたま自分がハインリヒ・ヴェルナーと親戚関係にあることを見つけた。彼女は、手紙や日記、その他の記録、話として伝わっていることを丁寧に集め調べた<sup>4)</sup>。

本稿においては、まず、ハインリヒ・ヴェルナーの生涯を、『ウィキペディア』、メッケ博士の論文、カーリン・リヒターの本からピックアップして年譜にまとめることにする。次に彼の家族構成、そして彼の生涯、曲の特徴について、論じてみたい。なぜ、このようなことをするのか？私達はヴェルナーの『野ばら』を聞くのが好きだからである。だから、彼の人生をもよく知りたいのである。注意すべき点は、この三つの資料において、史的実事がくいちがうことがあり、また、メッケ博士の論文はFrakturで書かれていて、カーリン・リヒターは手紙や日記に基づいているものの、創作している箇所があると推測されることである。

## 2. 年譜

- 1800年10月2日 アイヒスフェルト (Eichsfeld) 地方の村、キルヒオームフェルト (Kirchhohmfeld) で生まれる。  
11 才で、すでに村の学校でオルガンをひく。  
14 才まで両親の家で音楽の教育を受ける。  
15 才でザンクト・アンドレアスベルク (Sankt Andreasberg) で少年聖歌隊員となる<sup>5)</sup>。
- 1815－1817 年 ザンクト・アンドレアスベルクでラテン語学校に通う。
- 1817 年 ブラウンシュヴァイクへ行き、ギムナジウムに通う。  
教師の仕事につくための準備をしながら、音楽の勉強をさらに続けるためである<sup>6)</sup>。
- 1821 年 エアフルトで兵役義務を果たし、大学のゼミに通う。
- 1822 年 5 月 23 日, 24 日 教師の試験を受け、非常に優れた成績で合格する。  
ブラウンシュヴァイクへ帰り、音楽の家庭教師をして自分の生活

---

3) Karin Richter: Heinrich Werner: Komponist von Goethes „Heidenröslein“. Verleger: Duderstadt: Mecke 2000.

4) Die Wikipedia: a.a.O., 4 Weblinks.

5) Die Wikipedia: a.a.O., 1 Leben.

6) Friedrich Mecke: a.a.O., S. 221.

- 費をかせぐ。
- 1825 年 ブラウンシュヴァイクのオペラ劇場で合唱の副指揮者となる<sup>7)</sup>。  
ハノーファーとツェレでギムナジウムの音楽の教師の職に応募  
するが、うまくいかない。
- 1826 年 ヴォルフエンビュッテルのオルガン奏者の職に応募するが、うま  
くいかない。
- 1827 年 12 月 母親、死す。
- 1828 年 11 月 フィアンセ、マリー・コンラート (Marie Conradt) に対する愛を  
断念する。
- 1829 年 1 月 20 日 彼が指揮者として指導したブラウンシュヴァイクの男性合唱団の  
コンサートで『野ばら』が始めて歌われた<sup>8)</sup>。
- 1830 年 ホルツミンデン、ハノーファー (6 月)、故郷キルヒオームフェル  
トへ旅行する。ハノーファーでは、パガニーニの演奏を体験する。  
ホルツミンデンでオルガン奏者とギムナジウムの職に応募する  
が、うまくいかない。
- 1830 年 9 月 ブラウンシュヴァイクでの 9 月革命。
- 10 月 9 日 彼の作詞・作曲による自由の歌『その自由な男の人』 („Der freie  
Mann“), 『ブラウンシュヴァイク市民の挨拶』 („Gruß der  
Braunschweiger“) が、市民軍の合唱団によって、ヴィルヘルム公  
爵の前で歌われる。
- 1831 年 春 ベルリンへ旅をする。  
豪華建築物、美術品のコレクションを見学し、ツェルターの男性  
合唱団、シュライアーマッハーの講義を訪れる。
- 1832 年 春 故郷キルヒオームフェルトへの最後の旅。
- 7 月 ブラウンシュヴァイクで 19 才のシャルロッテ・ブルックマイア  
ー (Charlotte Bruckmeier) と婚約する。
- 10 月 肺結核にかかる。
- 1833 年 5 月 3 日 ブラウンシュヴァイクで死去する。同地に埋葬される。

7) Ebenda, S. 222.

8) Die Wikipedia: a.a.O., 1 Leben.

### 3. 家族構成

父親は、ヨハン・ジーモン・ヴェルナー（Johann Simon Werner: 1766 年、ゴータ近郊のゾンネボルン生まれ、1840 年、キルヒオームフェルト死去）といい、村の学校の教師であり、教会の聖歌隊長であった。宗教はプロテスタント派であった<sup>9)</sup>。母親は、マリー・シャルロッテ・ヴェルナー（Marie Charlotte Werner: 旧姓は Freytag, 1772 年キルヒオームフェルトで生まれる。1827 年死去）といった。子供達は 5 人で、カロリーネ（Caroline）、フリッツ（Fritz: 1798-1877）、ハインリヒ（Heinrich: 1800-1833）、ヴィルヘルム（Wilhelm: 1806-1848）、ヴィルヘルミーネ（Wilhelmine: 1809-）である。カロリーネとフリッツのどちらが年長者であるかは不明である。父親は、5 人の子供たちに自分でピアノ演奏、バイオリン演奏、フルート演奏、ギター演奏、歌唱を教え<sup>10)</sup>、3 人の息子達はみな音楽家となった。長男のフリッツは、最初ベルリンのギムナジウムで音楽教師として働き、後にヴィッテンベルクの音楽監督になった。三男のヴィルヘルムは、デュッセルドルフ、アイゼナハ、シュトラースブルク、ミュールハウゼン、フライブルク、アムステルダムで指揮者として働いた<sup>11)</sup>。なお、ハインリヒ・ヴェルナーの往復書簡の一部が今日まで残されてきたのは、末の妹ヴィルヘルミーネ（結婚後、フリッケ夫人：Fricke）の子孫によって大切に保存されていたためである<sup>12)</sup>。

### 4. ハインリヒ・ヴェルナーの生涯

ハインリヒ・ヴェルナーは、1800 年 10 月 2 日、キルヒオームフェルトに生まれ、1833 年 5 月 3 日にブラウンシュヴァイクに没した。彼は、32 年の生涯において 84 曲作曲し、その大部分はリートであったと言われている<sup>13)</sup>。『野ばら』はすでに述べたように、1829 年、1 月 20 日、彼が指揮者として指導したブラウンシュヴァイク男性合唱団で始めて歌われた。ハインリヒは、教師の試験に合格して何度か公募に応募したが、採用されず、結局、自分の生活費を音楽の家庭教師と作曲によってかせいでいた。婚約は、彼の生涯において 2 度あったが、最初の婚約者はマリー・コンラートといい、彼がギムナジウムの生徒の頃に知り合ったが、成人してから彼女の父親の死によって生じた経済的理由により、破談となった<sup>14)</sup>。二度目の婚約者は、シャルロッテ・ブル

---

9) Friedrich Mecke: a.a.O., S. 220.

10) Ebenda, S. 220.

11) Karin Richter: a.a.O., S. 87.

12) Ebenda, S. 9.

13) Wikipedia: a.a.O., 1 Leben.

14) Karin Richter: a.a.O., S. 59.

ックマイアーといい、婚約中に彼が肺結核にかかり、婚約者に看病されながら死んでしまう。後には『野ばら』の曲、ただ一曲だけが後の世の人々に残された。

## 5. 曲の特徴

シューベルトの『野ばら』は、はずむようで格調たかく、ヴェルナーの『野ばら』は、なだらかで最後はさがり、子守唄のような静かな安らぎを持っている。しかも民謡調で素朴で、聞く人の耳に、そして体全体に自然に入ってきて、赤子だけでなく、最後は永遠なる眠りへと人に語りかけ、次の代へ、そしてまた次の代へと受け継がれるようななじみがある。そのように感じられるのは私だけであろうか？メッケ博士の論文には、ハインリッヒ・ヴェルナーの曲は、「メロディーは、しばしば音階的であり、簡単に歌えるような音度だけをもちいている。[中略……] 節の構成はある種のシンメトリーをなしている。そのシンメトリーは、メロディーとリズムの方向転換の繰り返しによって成し遂げられる。」<sup>15)</sup>とある。専門家の意見によると、「ハインリヒ・ヴェルナーの『野ばら』の原曲はホ長調で書かれていて8分の6拍子である。この拍子はゆらゆら揺れる感じが多いため、子守唄や舟歌に多い。最後が下りてくるのは、『下降音程』といって、曲を落ち着かせようとしている。」<sup>16)</sup>ということである。

## 6. おわりに

カーリン・リヒターは、彼女の書いた伝記『ハインリヒ・ヴェルナー、ゲーテの「野ばら」の作曲者』の本の最後で、婚約者シャルロッテ・ブルックマイアーの手紙を引用し、それを結びとしている。その内容を考えてみると、このような手紙を書く人に愛されていた人だったからこそ、なるほど、あのような曲ができたのだとうかがえるところである。

15) Friedrich Mecke: a.a.O., S. 223.

16) 聞き取り：ピアノの教師、本堂明子氏に2014年11月23日に教えて頂いた。